安平町で、ワイン文化が産声を上げる。

2022年5月に町が株式会社ダイナックス（以下、ダイナックス）と地方創生に関する包括協定を締結。その際、伊藤和弘代表取締役社長より「ワイン事業」への挑戦が話された。

まちの至る所で実りの秋を感じるようになったころ、醸造用のブドウを栽培している圃場に足を運んでみた。

－取材　小林　誠

圃場にお邪魔した日は、まさにブドウの収穫を行うという日だった。とは言っても、「今年はまだ収穫する予定ではなかった」と話してくれたのがワイン事業を統括する稲岡治さん（紹介は次のページで）。「ここにあるブドウの木はまだ若い。今年は木を強くしようと思っていたので花を摘んでいたんですけど。それでもいくらか花を着け、ブドウが実ったので試験的に収穫してみることにしたんです」と教えてくれた。

圃場には、15種類の品種が植えられている。それは、この土壌や気候にどういった品種が合うか育ててみないと分からないところがあるからだそう。なので、今の時点で、どの品種を主体として展開していくかは未定なのだとか。この日は「ツバイゲルト」と「ケルナー」の2品種を収穫。収穫にも同行させてもらったのだが、その作業は丁寧な手作業だった。一房ごとにはさみで収穫し、傷が付かないよう丁寧に収穫ボックスに詰めていく。ワインにするにはブドウを潰す。多少乱暴に扱うものなのだろうと思っていたが違った。「傷を付けてしまうとそこから腐敗したりカビに繋がったりしてしまう。そうなるとワインの品質にも影響するから極力優しく」と丁寧な手作業で収穫する訳を教えてくれたのは圃場の管理を行っている高橋洋二さんでした。

一房一房、手作業での収穫だ。